

松原忍さんは、以前釜ヶ崎で発行されていた雑誌「裸」の編集者であり、「裸」の会の会長であった。そして松原さんは西成警察署の防犯コーナーに勤務する警察官でもあった。

「裸」は、そういう松原さんの立場から、政治や宗教や労働者のいろいろな運動とのふれ合いを避けて、詩・短歌・俳句などの作品発表の場を自己を限定していた。

それはそれで一つの行き方であって、行き方に対する批判は批判として持ちながらも、発表される作品のなかに労働者の血がかよっているものを多く見出せるのは事実だった。

「裸」の作品を集めた「裸詩歌句集」から、すでにこの「労働者渡世」がいくつかを転載したのはそのためである。

松原さんが書いているように、「裸」が終刊してもう大分の時がすぎた。

「裸」に作品を発表していた人々は、どうしているのだろうか。

松原忍

裸の会  
の会  
員  
であ  
る  
松  
原  
忍  
さん  
へ

「裸の会」を解散し、皆さんとお別れしてから、早くも四年の歳月が流れ去りました。

皆さん、達者で過しているでしょうか。涙を吞んで「裸の会」を解散し、住みなれた大阪の地を離れた私は今、福山の山麓で多忙な仕事に打込んでいて、皆さんとお会いするいとまのない日々を送っています。

でも、そのような日々の合間にも、皆さんのことが気にかかり、

ひとりひとりの顔を思い浮かべています。皆さんは、裸の会が発行していた機関誌「裸」を、あれほど心の寄りどころにしていただけに、裸誌を廃刊した以後は、何に心の寄りどころを求めているだろうかと案じながら、この四年間を過してきました。

ところがこのたびふとしたきっかけから、皆さんが住んでいる町で発行している「労働者渡世」という月刊誌を入手し、編集委員の方達とも会いました。そして、裸の会の会員であった方が、「労働者渡世」に投稿していることを知りました。

ズバリ云って「労働者渡世」は政治色の濃い雑誌ですが、それはそれでよいと思います。「労働者渡世」は、釜ヶ崎（こう呼んでよいかどうかわかりませんが）で発行されている労働者達にとっての唯一の雑誌のように思えます。この雑誌をながく存続させていくためには、皆さんが裸誌に寄せていたような原稿をどしどし送り込む必要があると思います、この一文を寄せる次第です。

皆さん、裸誌に寄せていた情熱をも一度とりもどし、その情熱を「労働者渡世」に託して、生きる人間としての価値発見に努めて下さい。

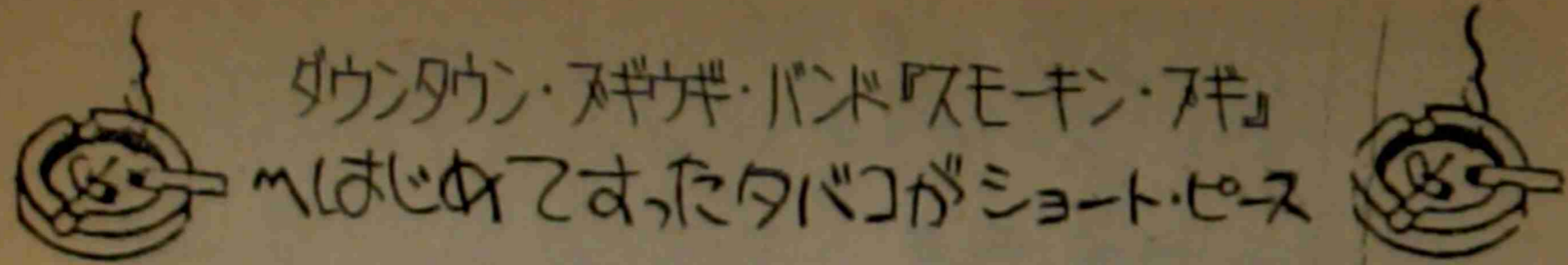
文学とは、時代の文化にこうけんするものでなくてはならないと思います。釜ヶ崎は暗い。釜ヶ崎を明るく住みよい町にするた

雑誌がなくなったから詩も短歌も俳句もやめてしまったのだろうか。そういう人もいるだろうが、いまもノートに書きためている人もきっといると思う。

松原さんの呼びかけは、やめてしまった人と、書きつづけている人の両方へのものとして読んでもらいたい。

「労働者渡世」は「政治色の濃い雑誌ですが」と松原さんは書いているが、松原さんのその判定が当たっているかいないか、それも自分自分で分析し、解釈してくれたらいいことである。

私たちは投稿を歓迎する。もと「裸」の会員であった人、「裸」なんてきらいだったという人、そんな雑誌など知らぬ人、要するに釜で生き



ダウン・スギヤ・バンド『スモークン・スギ』

へはじめて買ったタバコがショート・ピース

- 一、生活記録・詩・小説・短歌・俳句そのほかなんでも。
- 一、長さは自由だがあんまり長いと短くするかもしれない。
- 一、しめ切りは毎月二〇日。採否は当方で決定します。
- 一、《連絡先》に郵便で送るか、それとも「釜ヶ崎生協」(裏表紙ノ裏ノ地図参照)の人に預けて下さい。
- 一、近いうちに「暴動」特集、「ギャンブル」特集、「無頼仙」特集、をやる予定。意見・原稿を求めます。
- 一、オマケのハガキも活用して下さい。
- 一、創刊号(昨年一二月)から先月の外五号まで全部売切。

◆タバコ——タバコは酒ほど「うた」になつてないよう  
 です。と思つたら、最近ヘンなうたがはやつてるよう  
 です。◆タバコが火車の原因のトリブダ、というのはウ  
 ソ、と揚野浩という九州でアンコやつてる人が書いた小説  
 にあります。(天王寺の図書館に本があったハズだよ)  
 ———といつても、タバコの話ではないのだ。二四ページ  
 読んだところぢよつと一服しようというのだ。そしてだ  
 タバコと同じぐらゐの値段の、この雑誌の、宣伝をしよう  
 というのだ。(タバコは値上げしてもこれは上げない!!)

書いっつ原稿を。作ろっつみんなの雑誌を。

『アロタリア情話』

海援隊『母にさげるバラード』

セリフ  
 『小学校4年の時からタバコの味おぼえて  
 中学1年の時が歯のからまっくす……』

めには、いろんな手段がありましようが、ペンを愛する者達にと  
 っては、それなりに社会にこうけんする道がある筈です。ここで  
 一言云つておきたいことは、文学する者は、常に真実を愛し、真  
 実を追求する心構えで生きていくべきであるということ。そ  
 れがためには、自分自身を厳しく処していかなければならないの  
 です。  
 『裸の会』の会員であつた皆さん方は、労務者という境遇に身を  
 おいていても、みんな立派な文化人であつたと思います。  
 皆さん方の力で、『労務者渡世』を、価値あるよりよい雑誌に育  
 てて下さい。  
 皆さんもご存じのように、『裸』誌は、一一〇号をもって廃刊し  
 ました。  
 春うららら——〇番の灯が消える  
 灯を消せばまたも乱舞の孤蛾となる  
 鳴きたくも鳴くになかれぬ草ひばり  
 この三句は裸の会を解散し、私が大阪を離れる際に残した句で  
 す。あれ以来ペンを断つていた私ですが、久しぶりにペンを手に  
 しながら、皆さんのひとりひとりを、しみじみと思い出していま  
 す。

るみんなな投稿を歓迎する。た  
 だ、誌面にのせる、のせない  
 については、編集委員会にき  
 めさせてもらう。それと、の  
 せたからといって賞やお礼を  
 あげることはできない。この  
 二つだけは承知してもらいた  
 い。  
 編集委員会のうち三人が、  
 所用で大阪へきた松原さんと  
 話し合ったのは、まだ春も浅  
 い夜だったが、制約の多い公  
 職を離れた松原さんの思い出  
 話、内輪話は、多彩で面白か  
 った。  
 この松原さんの原稿は、そ  
 んな教時間をすごして帰つて  
 行った松原さんが送つてきた  
 もので、つまり「裸」の会の  
 元会長は、投稿の先頭を走っ  
 ているわけだ。  
 (編集委員 T)